

岐阜県史跡 金山城跡第1次発掘調査の結果について

◎調査期間 平成18年11月7日～平成19年2月2日

◎調査目的 金山城跡の建物跡や石垣などの様子と保存状況の確認、測量。
今年度は、本丸部分について実施しました。

◎調査場所 可児市兼山字古城山1418番211

◎調査面積 調査範囲の面積約2,000㎡ 内掘削調査した面積約500㎡

◎金山城跡について

1537年(天文6年)斎藤道三の養子、斎藤正義により古城山山頂に築城され、烏峰城と名付けられました。しかし、正義は1548年(天文17年)に久々利の土岐悪五郎に殺され、城主不在となりました。その後、1565年(永禄8年)に森可成(よしなり)が織田信長により烏峰城主を命ぜられ、金山城と名を改めました。以後、可成の子供の長可(ながよし)、忠政(ただまさ)と森家が3代にわたり城主を務めます。1599年(慶長4年)忠政が信州(長野県)川中島の海津城に国替えとなったのに伴い、石川備前守に授けられて、建物等は尾張(愛知県)犬山城へ引き取られたと伝えられます。

尚、本能寺の変で織田信長とともに討ち死にした森蘭丸は、可成の次男です。

(「金山記全集大成」による)

◎調査の成果

1. 検出された遺構

- ① 本丸の平坦面で、川原石を礎石に用いた建物跡(礎石建物)を6棟検出しました。(第3図、写真1)

最大のものは、南北4間×東西3間(礎石建物跡1 柱間の規模で7.6×5.7m 写真2)、最小のものは、南北2間×東西2間(礎石建物跡4 3.8×3.8m 写真3)。このうちの4棟(礎石建物跡1～4)は、柱の並びが揃っており、同時に存在していたと思われる。

これらの建物は、一連のものとして渡廊下等で繋がっていたものと思われます。礎石として使用されている川原石は、直径50cm前後の大きさを測ります。

- ② 礎石建物跡の南側の軒先、東西方向には、石組みの溝跡(雨だれの排水施設)を検出しました。現存長は16.8m、内幅20cm。

また、川原石を用いた石敷を2ヶ所(擬木の階段を登りきったところと、神社拝殿の北側)で検出しました(写真5)。この石敷は建物の間隙であり、人が歩く通路部分と思われる。

- ③ 建物が建てられた平坦面は、厚さ 20cm 程に土盛りをして固められていました。その整地層は 2 層確認できました。

検出した 5 棟の礎石建物跡は、上部の整地層に属するもので、下部の整地面は、上部整地層の上面から 20cm 前後下で検出されました。そこでは、上部の建物と同様に、礎石に使用されたと思われる川原石が検出されており、少なくとも建物が 2 時期に亘って建てられていたことが判明しました（写真 4）。

- ④ 本丸へ通ずる玄関（虎口・こぐち）部分は、先ず左右 2 箇所の石段から上り、更にメインの石段を登る構造になっていました（写真 6・7）。

この虎口部分の突き当たりの石垣直下には、礎石として使用された 4 個の大きな川原石が検出され、これは、本丸から張り出した建物を支えるための礎石と思われます（写真 8）。

- ⑤ 石垣は、本丸を囲むすべての斜面において検出されました。本丸の南西及び北西部分では、部分的に石垣を屈曲させて張り出すように造られています。これにより、本丸の形状を確定させることができました。

石積みは、天場に近い部分や角においては他所と比べて保存状態が悪く、おそらく廃城の際に意図的に壊されたものと思われます。

本丸の南斜面では、石垣の最下部と屈折点を確認しました（写真 12）。深さは現在の地表面よりも 1.5m 以上で、城が機能していた当時の通路面も検出されました。入口（虎口）部分へは、この石垣列に沿って犬走り状の通路を上ったものと考えられます。

北斜面と西斜面の石垣は 2 段構造になっており、その間には犬走り状の平坦面が検出されました。

また、北斜面と東斜面の石垣列には自然の岩盤が露頭している部分があり、これを削りつつ石積みを巧みにすりつけたり、屈折させていました（写真 11）。

2. 出土した遺物

- ① 本丸の整地層と崩れた石垣の堆積土中から、土師質（素焼き）の皿や天目茶碗、すり鉢などの陶器類、瓦などが整理用コンテナ 6 箱分出土しました（写真 22～24）。そのほとんどは細片です。

- ② 出土した遺物の大半は土師質皿（俗に「カワラケ」と呼ばれる素焼きの土器）です。このカワラケには、現在大中小 3 種類の大きさがあります。大は直径 16cm 前後、中は 9cm 前後、小は 6cm 前後を測ります。また、製作技法もロクロ成形と手づくね成形の 2 種類が確認できました。

カワラケは、宴会などの「ハレの場」で料理を盛ったり、盃として使用したと考えられています。ただし、ススが付着しているものもあり、灯明皿としても利用されたようです。

- ③ 瓦は、軒丸、軒平、丸、平の 4 種類が出土しました。軒丸瓦は巴文が型作りされてお

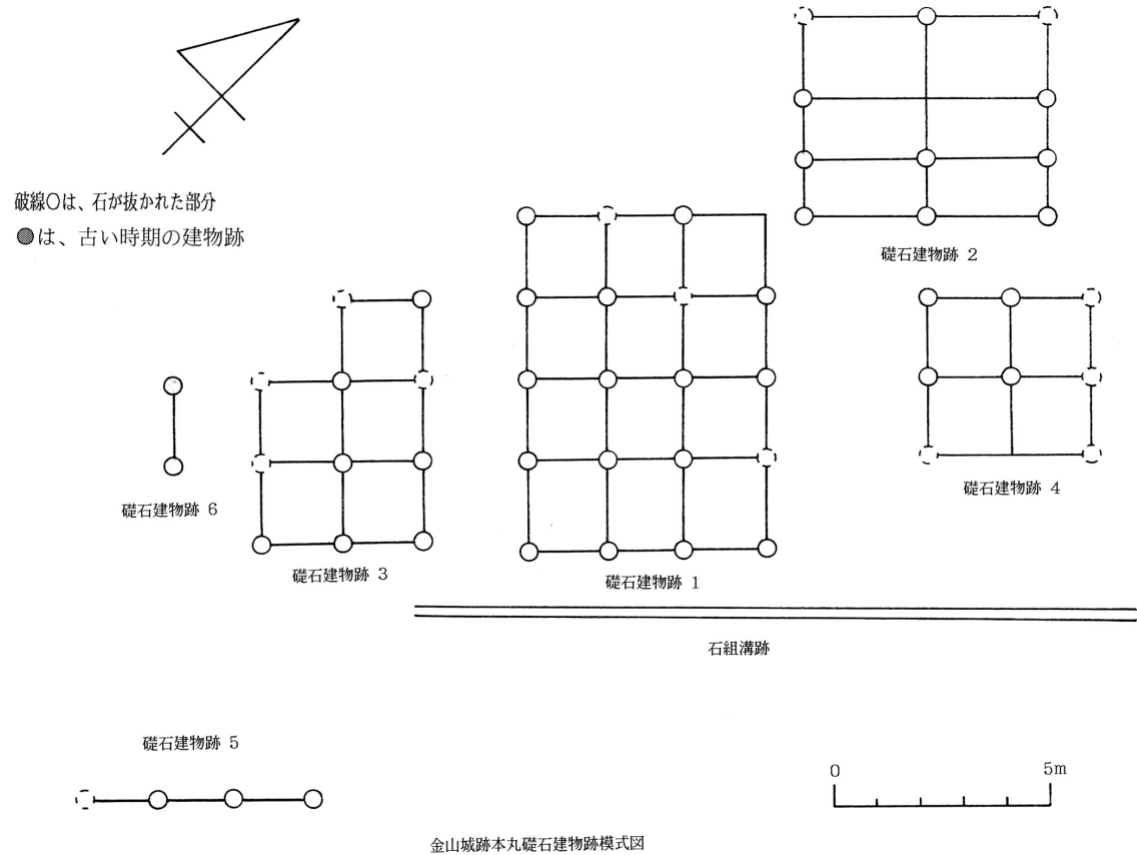
り、直径約 15cm を測ります。

- ④ 出土遺物の年代は、現在確認できるものでは、16 世紀中ごろに属するものが含まれています。

◎その他

- ① 調査終了後、危険な場所などの埋め戻しをしました。本丸平坦面では、検出された礎石建物跡が分かるように、ロープを張り明示してあります。石垣列も、北側を除き見学可能です。
- ② 19 年度以降についても場所を変えて同様な調査を続け、金山城跡の全容を解明していく予定です。

今回の調査で判明した本丸の建物跡



第 1 図 本丸礎石建物跡配置模式図（原図は S = 1 / 1 0 0 で作成）

尚、古い時期の建物跡は、礎石建物跡 6 です。



写真 1
本丸全景写真
（北西から）



写真 2
本丸 礎石建物跡 1
（北から）

最大の建物です。



写真 3
本丸 礎石建物跡 4
（北西から）

最小の建物です。
広さは8畳ほどです。



写真4
本丸トレンチ内
新しい時期の礎石
（左）と古い時期の礎
石（右） （南から）

真ん中の線より上が
 新しい整地層、下が古
 い整地層です。



写真5
本丸神社拝殿北側の
石畳（西から）

L 字形に並ぶ内側に川
 原石の石畳が並びま
 す。



写真6
虎口（入口）北側石垣
（南から）



写真7
虎口西側の石段
(南東から)

石段の先端(下側)は
現在の地表より下か
ら検出しました。



写真8
虎口北側の礎石列
(西から)

礎石は直径 50cm 程の
大きな川原石を使っ
ています。



写真9
東斜面石垣の土砂の
堆積状況(北から)

スケールの長さは2
mです。



写真 10
東斜面石垣南側
(南東から)



写真 11
東斜面石垣北側
(東から)

左端の石の塊は、山の岩盤で、その上に石を積んでいます。



写真 12
南斜面中央屈接部の
石垣 (南東から)

写真中央最上段の石の上面が、これまで歩いていた道の表面です。
この石から城があった当時の地表面まで1.5m以上ありました。



写真 13
西斜面南突出部西側
石垣（南西から）

右側の大きな石が南
西角の石です。
最も下の石は、これよ
り1m以上下にある
と思われます。



写真 14
西斜面中央屈接部石
垣（南西から）

中央より左側が北突
出部となります。



写真 15
西斜面北突出部下段
石垣（西から）

検出した部分は斜面
の中腹部分です。



写真 16
北斜面西突出部下段
石垣（西から）

手前の大きな石は、北西角の石です。



写真 17
北斜面西突出部下段
石垣（北東から）

上の写真の奥の石垣を逆方向から撮影したものです。



写真 18
北斜面西突出部上段
石垣（北東から）

上の写真のほぼ上部にあたります。



写真 19
北斜面中央屈折部東
側石垣（南東から）

他の石垣と比べやや
小さめの石を使い、雑
に見える積み方をし
ています。



写真 20
北斜面中央屈折部断
ち割り断面（西から）

上の写真のすぐ東側
を土の堆積状況を確
認するため、岩盤まで
掘り下げました。

本丸平坦面と同様
の2つの整地層と岩
盤が削られているの
を確認しました。



写真 21
北斜面東側石垣
（北西から）



写真 22
北斜面中央屈折部カ
ワラケ出土状態
(北から)



写真 23
北斜面中央屈折部徳
利出土状態 (東から)

上のカワラケより一
つ下の土層から出土
しました。

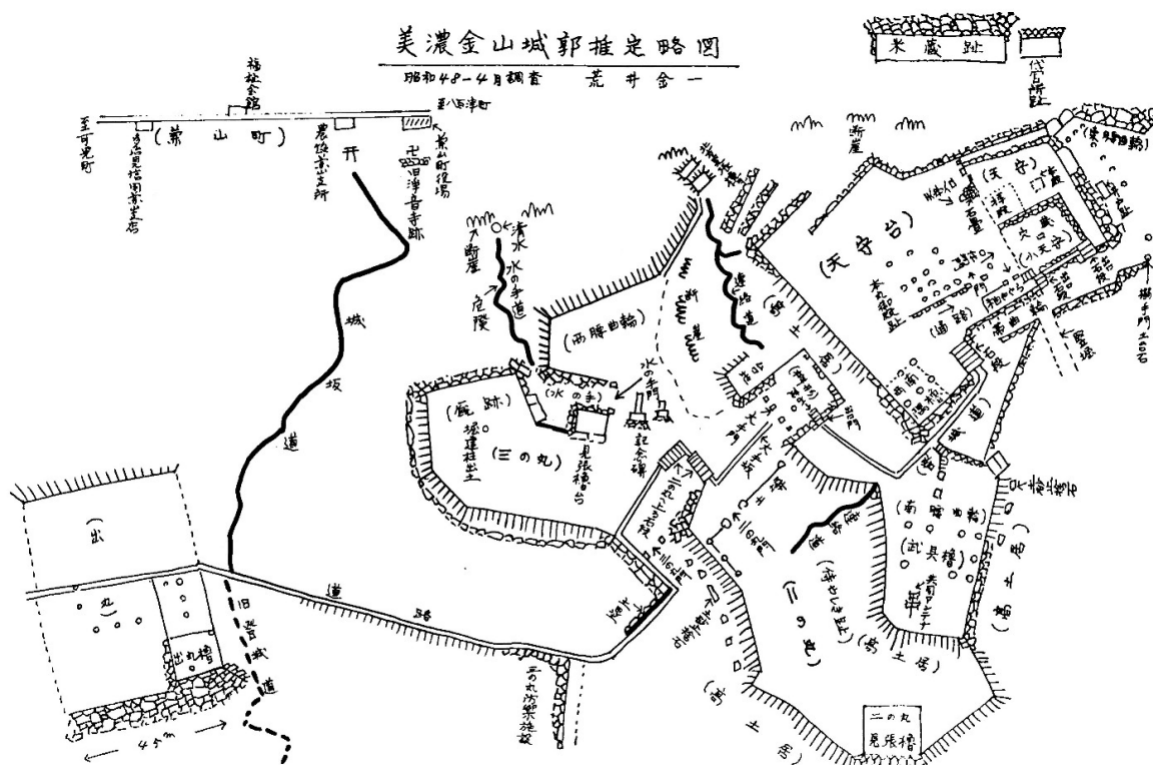


写真 24
出土遺物の一部
(水洗い後)

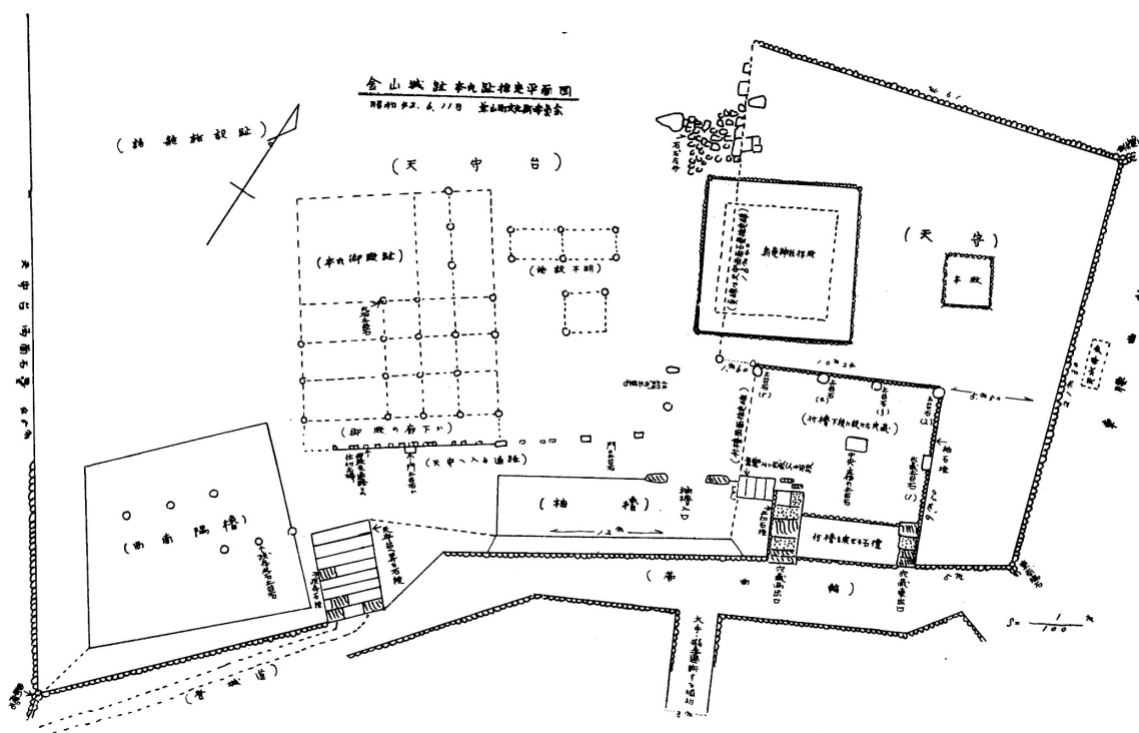
左側 2 点は瓦、中央の
5 点は施釉陶器 (上は
すり鉢、下右は皿、下
左上は天目茶碗)、右
の 4 点はカワラケで
す。カワラケは写真 22
を洗ったものです。

参考資料 今回の発掘調査前に作られていた図面

出典 昭和48年(1973) 兼山町史蹟保存会『史蹟 金山城跡』



第2図 金山城跡全体の縄張り推定略図(昭和48年作成)



第3図 金山城跡本丸部分推定平面図(昭和42年作成)